

【インタビュー】

樋渡啓祐・武雄市長かく語りき

地方主権が進む昨今、地方公共団体はどう行動すべきか。精力的な活動で注目を集める、樋渡啓祐・武雄市長にその取り組みを聞いた。

——「イノシシ課」など、市長はユニークな課を市役所内にて作られています、改革していく中で難しいと思われることは何ですか。

「何も無い。なぜかという、基本的に僕は政治家として選ばれているわけですよ。もし僕が嫌だったら、次の選挙で落とせばいいだけの話であって。民主主義とはある意味独裁を求める包括委任なんですよね。だからよくほら、市民の意見を聞けとか何とか言われるけど、それは嘘だと僕自身は思っていて。勿論聞くポーズはするよ。実際に聞いたりもたまにはするけど。でもそれだったら、もう市長にならなかつたらいいし。だから、実際の評価はもう4年後、まあ、僕の場合は3年後だけど、それでいいと思っているから。だから全然、何を言われても、

どうともない。」

——市長は「みんなの政策集」というのを作成されていて、その中で結構市民の不満を拾い上げていらつしやると伺うのですが。

「それはどういうことかという、選挙の時だけはみんな政策に関心を持つんだよね。僕はマニフェストと言う言葉が嫌いだから、政策集というものを出して、後はそれをやるっていうことだけ。だから当選後に意見を聞く必要はあまりないんだよね。もう聞いているから、選挙で後はそれを実行するだけ。」

——市長2期目ですが、就任当初と武雄市はどのように変わったでしょうか。

「そりやもう。なんだろうね、どう変わったか僕もよく分からないけど、少なくとも前の市長さんと180度違うからね。ボトムアップとトップダウンも違うし、ものすごくやりすぎるって人に変ったから、そりや市民を物凄く戸惑っていると思いますよ。でも、それがいいと思うんだよね。政治っていうのは、無関心が一番怖いんですね。だから批判であっても、賛成であっても、関心があるっていうのがすごい大事。」

——市長本人の意識、就任当初とは何か変わった？

「あんま変わらないね。もう小学生の時から変わります。集団行動ができないし、協調性は全然ないし、努力もロクになくて……だから全くないね。高校の時もひきこもりだし、大学の方は東大だけど、全く行ってなかったし。だから、全く、社会人としては本当に最低です。友達もゼロですね。だけど、それでもできる仕事が首長かな、と。12年ほど総務省(※入省当時は総務庁)というところにおいてやったけど、まあそのまま続けていたら、僕自身潰れていたよね。」

——武雄市の課の名前は市長さんが決められていることですが。

「小学生にも分かるように。だから、行政の言葉とかが難しいとか暗いとか言われるでしょ？それはおかしい話で、住民にとって一番身近な自治体特に市役所の場合、市民の人が一番分かる、たとえばイノシシ課、普通は有害鳥類なんとか対策課とかなんだけど、それじゃ分からないじゃない？猪鹿蝶じゃあるまいし。だから何をやるかっていうのをはつきりと出して、しかも短くてインパクトのあるようにしようと。もともと僕は電通に就職しようと考えていて、キヤッチコピーやデザインも好きだから。」

——市長は震災復興支援に関して、九州の自治体の中では特に積極的で、対外的にも発信されているのですが、そのモチベーションはどこから来るのですか？

「画やライブで見て同じ日本人がああいった風にリアルに見たのが一番大きいですね。あれが阪神淡路みたいに例えば、終わったことを、あの地震は朝早かったでしょう確か五時何分か、それと当時あまり映像がリアルでなかったけど、今回はハイビジョンでしかもライブでやっていったでしょう？日本人として何ができるか、だって同じ日本人じゃない？可哀想なもの。それともうひとつ、市長だから現地に行かないと何も分からないというのもある。行ってよく分かったのだけど、報道とぜんぜん違うと。確かに通ずるものもあるしまるで違うということもないけど。それを市政に生かすというのもあるし。」

——佐賀県内のほかの市町村と何か協力して：

「ないねえ。知事とは仲いいからよく話すけどほかの市町村とはしないよね。言ってもわからないし。なんで速さが要求されるのか、分かんないもの彼らは。分かる人は市長や町長になつていないもの。」

——その点古川知事は。

「うん。近いものがあるよね。それが今回試

されていて、孫正義さんが今回福島に行かれてよく分かったのだけど、やっぱり平時のときはリーダーって要らないんだよね。だって草が一杯あるもの。好きなだけ食べて、眠ればいいのだし。「君は平時は役に立たないけど有事には役に立つよね」と孫さんは言っていて。やっぱり決断力だよな。」



——決断力は平時には見えないもの？

「見えないというか要らないんだよね。どこ

で寝ようが別に好きなだけ食べ寝て。でも、有事になると草がないんだよね、だから草を自分もつてきたり、我慢しろと言わなければいけない。それはリーダーしか言えないんだよね。」

——そういった資質を他の自治体の首長は持っていない？

「うん、九割五分ぐらいだな。九割八分といってもいいな。なっちゃいけない人がなっているもの。そう思うよ。ほんと。なんでこの人たちはこんな動きしかできないのか。菅さんや地方の首長見てもそうだし。」

——具体的に今、自治体の支援活動に必要なのはどういったもの？

「ニーズに応じたことをすればいいのであって、例えば人を送ったり金を送ったり。実際僕なんかはそういったことをコントロールする人が欲しいとある人から言われて、僕のネットワークを使って今度内閣府から行くのね、35歳の副市長として、内閣府の後輩が。その人だけじゃだめだから、その子を支える職員をうちから出すの。ボランティアが必要なら市民ボランティアを送るなど。いろいろな方法があるんだけど、それが動くか動かないかは一つのポイントだよ。動かせるのかどうかもポイントだよな。」

——多くの自治体がうまく動いていないと？

「動いていないね。だって国のせいばかりにして。批判は誰でもできるもの。じゃあ自分が動けって。動かない人に人を批判する資格、ないよね。日本はそれがあまりにも多すぎる。でも、三重県の松坂市長などは動くよね、そうそうあと近畿では、大阪の箕面市長とか。新潟の佐渡市長も。みんな30代なんだよね。動くよね。若い市長は。」

——公共政策大学院生へのメッセージを一言頂きたいのですが。

「首長になれたことですよ。だって今首長だつてすぐなれますよね。公共政策大学院で学んで、企業に就職してもなんにもならないよ。NPOなんてダメダメ。首長のいいところは同じ政治家でも議員と違い決定権があるんだよね。でも正確に言うとは首長には法律上、決定権が無いんだよね。議会に議決権があるの。僕、一円も予算を決められないの。首長はいわば大統領。議会があるから、執行権しかないの。だけど事実上の決定権があるから、だからみんな首長になればいいんだよ。そうすると自分たちが学んできたことがあっているのかそうでないのか、そこでしか検証できないと思うの。こういうところで学んでいる人たちが首長になってほしい

と思うよね。学んだことを実現せしめるとね。」



——実現せしめるには首長になるしかないと？

「しか、ないね。だって公務員になっても自分がやりたいことのみやれるわけじゃないもの。首長のいいところは、僕は4年3ヶ月したけど、4年に一度は洗礼を受けるわけだからさ。」

——将来私たちの中から将来樋渡市長のような行動力がある市長が生まれるように、これからがんばっていききたいと思います。

「すこし言いますけど、日本だけです。学んだのにぜんぜん違うところに行くのは。」

だったら違うところに行けと。ここにいるという事は義務ですよ、首長になるというのは。だから僕ら大人世代として何が必要かというと、もう少し参入しやすいように、たとえば公務員で受けるにしても、やめなきゃいけない、まあぼくもそうなんだけど受けられないんだよね。公務員の身分を保持したままでは出られないとおかしいよね、それ。やめたらまた戻ってこられるようにさ、ねえウルトラマンセブンみたいに、って古いか。」

——今日は大変貴重なお話を・・・

「貴重ですか？ほんともう最悪でしたね。」

樋渡 啓祐

ひわたし けいすけ

1969(昭和44)年佐賀県武雄市生まれ。1933年、東京大学経済学部卒業後、同年総務庁(現総務省)に入庁。高槻市市長公室長、総務省大臣官房秘書課課長補佐などを経て、2005年総務省を退職。2006年、武雄市長選挙に立候補し初当選。当選当時、全国最年少市長。2010年より2期目。著作は、『首長パンチ 最年少市長 GABBA 奮闘記』(講談社、2010)、他。